

中堅受験校の高校生の進路形成過程における 「悩み」の実証的研究

北海道大学大学院 三関直樹

【キーワード】進路形成上の悩み，表層的な進路意識，将来・職業志向，成績・自己資本，世情

1 はじめに ～ 問題の所在と研究の課題

本研究は，中堅受験校の生徒が直面する進路形成上の「悩み」に着目し，その「悩み」の要因が，進路形成においてどのように影響しているのかを分析し，中堅受験校の進路指導における示唆を検討したものである。学力中間層の高校生は「進路希望決定が表層的に行なわれているのではないかと推測し，生徒の進路形成上の「悩み」に焦点をあてた検討を行なった。

高校教員を対象にした調査（近藤2009，リクルート2012）によると，「将来志望にこだわりがある一方で進学先にあっさり妥協」「将来展望の吟味が希薄な進学動機」「将来展望が不明確で進路志望が確定できない」など，教師の側から見た指導の困難性が指摘されている。また，生徒たちには，「将来への展望をもつことが難しく，学習することが志望実現に伴うリスクを回避する手段として認識できていない」という実態があるとも考えられる。

本研究では，中堅受験校の高校生の進路形成上の「悩み」の特性をつかむため，高校2年9月段階でのインタビュー調査を実施し，得られた回答を「将来・職業志向」と「成績・自己資本」（「成績・自己資本」とは，学力と努力量，自己理解を合わせたものとして使用している。学力と努力量はその取り組み自体によって増減し，自己理解もそれにより深浅するため，「資本」という表現にした）の2軸により「悩み」の類型化を行い，「絞られる」「偽装と拡散」「検索迷子」「計測不能」の4つの「悩み」類型を抽出した。さらに，高校3年12月段階で同じ生徒に対して追加調査を実施し，各類型に属する生徒の「悩み」は時間を経てどのように遷移するのかを確認した。

また，本研究の前提の「進路希望決定が表層的に行なわれているのではないかと」さらには「表層的な進路意識と学習意欲には連動性がないのではないかと」の仮説について，抽出した4つの類型から理解し実証的に分析することを目的とした。

2 生徒調査の調査方法

調査対象校（以下「A高校」とする）の生徒調査は，①2013年3月，2年生全員対象，質問紙による「生活意識と進路イメージに関する調査」（以下「アンケート調査」），②2013年9月，2年生17名（男子10名，女子7名）への「進路志望に関するインタビュー調査」（以下「インタビュー調査」），③2014年12月，②で協力してくれた生徒に対しての追加の「進路志望に関するインタビュー調査」（以下「追加調査」）の3点である。

3 生徒の進路形成を取り巻く世情の分析

(1) A高校の進路志望の決め方の概要

アンケート調査より，A高校の進路志望の状況を分析する。志望する学校種を決めた時期（図表1）

図表 1. 進学志望の決定時期

		問3_1_3 進学決定時期								合計
		1年春	1年夏	1年秋	1年冬	2年春	2年夏	2年秋	2年冬	
問3_2_4 学校種別	国公立大学	147	20	5	7	8	6	4	4	201
	私立大学	34	4	3	5	3	3	5	0	57
	短期大学	3	0	0	0	1	0	0	1	5
	専門学校	3	4	0	0	2	2	3	2	16
	未定	6	1	0	0	0	2	0	0	9
合計		193	29	8	12	14	13	12	7	288

図表 2. 進路志望別集計表

H25 2年秋調査志望集計		全 体		男 子		女 子	
受検者数		317		169		148	
志望別	進学	305	96.2%	162	95.9%	143	96.6%
	就職	11	3.5%	7	4.1%	4	2.7%
	その他	1	0.3%	0	0.0%	1	0.7%
進学者志望分類	国公立大－文系	113	37.0%	68	40.2%	45	30.4%
	国公立大－理系	83	27.2%	63	37.3%	20	13.5%
	私立大－文系	56	18.4%	21	12.4%	35	23.6%
	私立大－理系	12	3.9%	4	2.4%	8	5.4%
	準大学	1	0.3%	1	0.6%	0	0.0%
	短期大学	11	3.6%	0	0.0%	11	7.4%
	看護系・医療系専門学校	13	4.3%	1	0.6%	12	8.1%
就職者志望分類	各種専門学校	16	5.2%	4	2.4%	12	8.1%
	国家公務員	2	18.2%	1	0.6%	1	0.7%
	北海道職員（一般事務）	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	各市町村職員（札幌市を含む）	5	45.5%	3	1.8%	2	1.4%
	警察官	1	9.1%	0	0.0%	1	0.7%
	消防士	3	27.3%	3	1.8%	0	0.0%
	自衛隊	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	民間企業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	家事手伝い	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

* 割合は項目ごとの、項目（太枠）内での比率

が1年春である生徒が62% (187名) となっている。入学する生徒たちの、大学進学そのものの希望は、あるいは、高校入学以前から決まっていたとも考えられる。

また、進学先所在地を見ても、札幌圏での進学志望は進学志望者 (280名) のうち50% (140名) であった。多くの生徒が自宅からの進学を希望している。国公立大学での志望を見ると、偏差値ランクの高い札幌圏の大学から、現在の成績の見合いを吟味し、札幌圏以外の道内の大学を志望しているのではないかと考えられる。

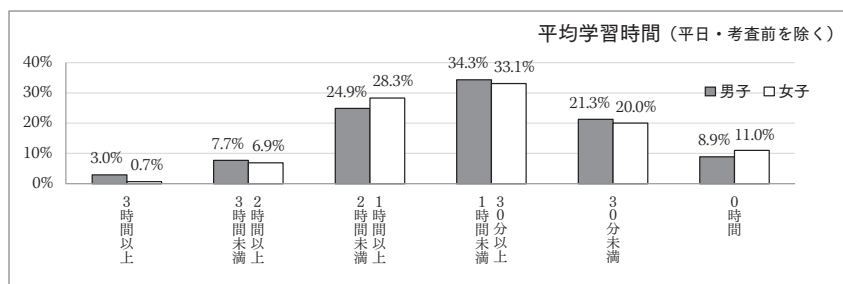
A 高校2年秋季進路調査より詳細を確認する。志望別 (図表2) では、進学志望が96%、就職 (公務員) 志望が4% であった。進学者志望分類では「国公立大学」(文理合算) 64% (196名), 「私立大学」(文理合算) 22% (68名) と、進学志望の86% (264名)、全体の83% が4年制大学志望であった。

次に「学習時間」について、図表3に平日のものを、図表4に休日のものを示す。平日1時間未満が全体では64% (男65%, 女64%), 休日2時間未満が全体の73% (男75%, 女71%) であった。

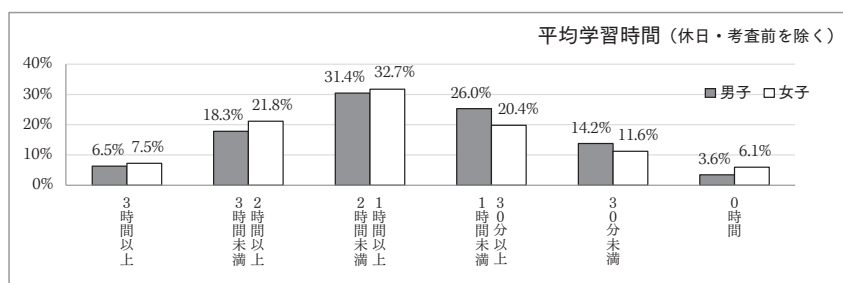
また、「勉強する理由」について、図表5 (男女別集計) に示す。集計全体では、「進路を考えて」が63%, 「宿題や小テストのために仕方なく」が26% となっている。

進学志望が多い割に「進路を考えて」の学習理由は比較的少ない。「学習時間の少なさ」「勉強する理由」から、大学受験が学びの動機づけとして機能していない可能性があると考えられる。

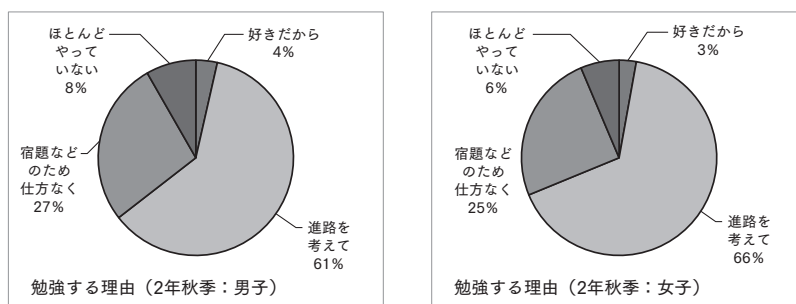
図表3. 平日の平均学習時間



図表4. 休日の平均学習時間



図表5. 勉強する理由：男女別



(2) 世情の分析

生徒の進路形成を取り巻く環境について、①学校・教師、②保護者、③地域性、④友人関係の4つの環境要因を検討した。その要因を本研究では「世情」（生徒を取り巻く学校・教師との関係や保護者との関係、友人関係などでの表裏をなす複雑な環境を「世情」と表現して本研究では使用する）と定義した。生徒の進路意識はどのような問題群に直面しているのかを分析した。

①学校・教師の世情を検討する。学校・教師の進路指導では、その指導に応えるべく、生徒たちは考えようとしている。外形的な意識付けが内発的な動機づけになっていない。将来目標を考えていないのではなく、考えているがまとまりがつかない。外部要因（担任教師との面談や教科選択の締切など）から、目標の早期構築を迫られ、その切迫感と成績資本の変動の見通しを立てながら、将来展望に折り合いをつけていると考えられる。

②保護者の世情を検討する。保護者との関係では、保護者の価値観や行動に対して、期待された進路コースをはみ出さないような、保護者も納得する「なんとなく」の進路志望を、学校・教

師の進路指導に迫られながら、子どもたちは表面に出していると考えられる。

③地域性の世情を検討する。生徒のA高校への入学動機は、ある程度のレベルの大学への進学を目標とするものである。それがかなう高校として、中学校の進路指導はもとより、保護者や地域に認知されている。そのためか、生徒の入学直後の進路調査では大学名を記入してくるものが多い。しかし、A高校の生徒は、入学後、大学進学への志望のこだわり感が強い層と、ほどほど感の層とに分化していく。また、成績・自己資本の変動による「志望の置き換え」と置き換えができるほどの数がある大学・学部が札幌市内およびその周辺に多いというのも、A高校が所在する地域の特性である。

④生徒の人間関係の世情を検討する。学校・教師の進路目標の達成に向けた「受験は団体戦」の雰囲気が醸成されているが、生徒自身は「受験は個人戦」と割り切った意識が強い。競争が煽り立てられている中で、同質性の目標をもつ集団形成がありながらも「人は人、自分は自分」とし、本音をさらけ出せるような人間関係が形成されていない。部活動での団結力は強いが、同じチームメイトにおいても、将来展望や受験に関しては多くを語らない姿勢はインタビュー調査からも見受けられる。

4 「悩み」の類型抽出と経時変化からみる類型の変遷

(1) 「悩み」の類型抽出

本研究では、学力中間層に位置する高校生の「進路希望決定が表層的に行なわれているのではないか」との推測のもと、生徒の進路形成上の「悩み」要因を抽出するため、インタビュー調査を実施した。インタビュー調査での質問項目は、①高校卒業後の進路希望が決まっているか、②自身の進路希望に関しての保護者の考えや意見、③高校生活における部活動の位置づけ、④学校生活での友人とのかかわり、⑤先生方との面談が進路希望を決める影響、⑥進路学習や教科選択などが進路希望を決める影響、⑦進路についての悩みや困りの有無。これらの回答内容を分析した。「将来・職業志向」と「成績・自己資本」の2軸により回答内容の特徴を取り出し類型化を行い、「絞られる」「偽装と拡散」「検索迷子」「計測不能」の4類型を抽出した。2年9月インタビュー調査での生徒の職業志向と類型分類を図表6に示す。

類型Ⅰ「絞られる」の生徒は、志望動向ははっきりとしており、志望校に対する成績・自己資本はある程度確保されている。志望の絞込みをはっきりとさせている生徒たちが、志望到達のための欲求を目指す受験技術の獲得方法を模索する、いわば受験生風の悩みである。この類型の生徒は、目指す職業がはっきりとしており志望校が明確である。そのため、効率のよい受験勉強・受験手段(推薦入試やAO入試など)の追求による志望達成の欲求を持っている。

類型Ⅱ「偽装と拡散」の生徒は、志望動向の度合いをはっきりとさせてはいるが、成績・自己資本と比較すると志望が合致していない。進路希望が成績・自己資本と見合わずに拡散ししている。生徒自身の成績・自己資本の不足、保護者の教育期待の大きさ、学校・教師の進路指導との意識のかい離から、進路志望の偽装が見られる。

類型Ⅲ「検索迷子」の生徒は、ぼんやりとした志望動向の度合いではあるが、ぼんやりと見える志望校と成績・自己資本は比較的達成度合いが大きい。現状の成績を肯定したなかで、今後の志望校の検索において、ばらつきやふらつきが大きいことがこの類型の生徒の悩みである。志望

図表6. インタビューによる志望動向と類型分類

類型	人	性別	第1志望系統	職業志向	類型	人	性別	第1志望系統	職業志向
類型 I	G	男	道内国立大学商学部	経営学	類型 II	A	男	市内地方公務員	公務員(事務職)
	O	男	市内私立大学 法学部	公務員・警察官 司法書士		B	男	道内国立大学美術専攻 道外美術大学油絵学科	美術系の仕事
	Q	男	市内公立大学 デザイン学部	絵本作家 ペーパークラフト講師		I	男	道外公立医療系大学 (診療放射線技師養成)	放射線技師
	C	女	道内専門学校 航空機整備科	航空機整備士		D	女	市内公立大学 看護学部	看護師・保健師
	L	女	市内病院附属 看護学校	看護師		E	女	道内国立教員養成系大 学(幼児教育)	保育士
						P	女	市内国立大学 文系学部	心理学 カウンセラー
類型 III	N	男	道内国立工業大学	建築設計か機械工学 校られていない	類型 IV	F	男	国公立大学文系学部	決められていない
	K	女	市内短期大学教養学科 市内私立大学観光学部	観光を勉強したい 決められていない		J	男	市内私立大学 法学部	決められていない
						M	男	市内国立大学 水産学部	よくわかっていない
						H	女	私立大学文系学部 市内私立短期大学	決められていない

がはっきりとせず、成績・自己資本の上昇志向が希薄なため、学習に対する焦りがなく、成績低下による志望の押し下げが懸念される。

類型IV「計測不能」の生徒は、具体性が見えない大学への進学志向をもち、成績・自己資本が大学進学に見合うほど持ち合わせていない。具体的な進路志望を決めることができないことに対する焦りと、成績・自己資本が追いついていかないことへの焦りの、二重の焦りが悩みになっている。志望動向や成績・自己資本の上昇への思考を停止させ、「とりあえず進学」というような状況を作り出している。

(2)「悩み」の経時変化

2年9月インタビュー調査に回答した生徒の経時変化を分析する。生徒の進路志望の決定を3年12月調査から確認し、進路決定において各「悩み」類型に変遷が見られるのか分析した。

3年12月の追加調査での生徒の状況を、2年9月のインタビュー調査での類型別に検討する。

類型Iから3年12月における類型の変遷について図表7に示し検討する。類型Iから類型IIIへ変遷した1名(Q)の将来・職業志向は変わらない。3年8月に大学から専門学校へ志望変更した。現状でも成績・自己資本は2年9月の第1志望に適っている。きちんと悩んだ変更だが、将来・職業志向と専門学校のマッチングが出来ない状況が続いている。また、類型Iにとどまっている生徒は、明確な将来・職業志向の達成に向けた、成績・自己資本の増強・維持のための学習モチベーションの調達に成功したと見ることができる。

類型IIから3年12月における類型の変遷について図表8に示し検討する。類型IIから類型Iへ変遷した生徒は、将来・職業志向が明確化し、成績・自己資本が見合う「達成するべき目標」が見えた(決まった)生徒たちである。その変遷は、成績・自己資本の資本増加へのあきらめから志望の押し下げを自己納得し、成績・自己資本の資本量が見合うところへの志望の押し下げによるものである。逆に、成績・自己資本の見合いから志望を押し上げ類型Iに変遷した生徒は、類型IIIから類型IIを経由した1名(N)である。また、類型IIより類型Iへ変遷した生徒は、3年12月の段階までに進路志望の決定に決着をつける変遷している。また、類型IIにとどまっている生徒

図表7. 2年9月の類型Ⅰの生徒の追加調査時のインタビュー内容と類型の変遷

類型	人	性別	高校2年生(2013年)9月 インタビュー調査時点	高校3年生(2014年)12月時点の志望(決定)		
			第1志望系統・職業志向	類型 移動	第1志望系統・職業志向	職業志向・結果状況・追加インタビュー
I	G	男	道内国立大学 商学部(経営学)	-	道内国立教員養成系大学 (英語教育・国際教育)	2年9月の第2志望が道内国立教員養成系大学であった 部活動した3年6月以降、経営学系統か教員養成系統で迷う 都内有名大学経済学部指定校制推薦も検討(保護者も承諾) 指定校推薦は志願者が他にいたため出願を見合わせる 道内国立教員養成系大学が成績に見合い志望を固めている 部活動引退後は学習時間を大幅に増やしている
I	O	男	市内私立大学法学部 公務員・警察官 司法書士	-	市内私立大学法学部 公務員・警察官 司法書士	12月指定校制推薦入試で合格、第1志望は一貫していた 学習評定値が基準を超えており指定校制推薦入試に出願 都内有名私大法学部指定校枠を勧められるが志望は変わらない 職業志望はインタビュー時と変わらない
I	Q	男	市内公立大学 デザイン学部 絵本作家 ペーパークラフト講師	III	私立大学デザイン学部 (地域を問わない) 絵本作家	インタビュー時は市内公立大デザイン学部を志望 3年8月に志望を変えセンター試験には出願していない 絵本作家やクラフト講師は大学に行かなくてもできる 手に技術をつけるには専門学校で十分と考えている
I	C	女	道内専門学校 航空機整備科	-	道内専門学校 航空機整備科 航空機整備士	10月一般推薦入試合格 進学後1級整備士コースに進みたいと考えている 進学後の勉強についていけるかどうか不安を持っている
I	L	女	市内病院附属看護学校 看護師	-	市内高等看護専門学校 看護師	看護学校の志望、第1志望校とも2年9月とは変わらず 成績との見合いも志望する看護学校とあっている 大学の看護学部は考えず3年で資格を取って働きたいと希望 3年夏休みより看護予備校へ通っている 3年生での学習時間も大幅に増やしている

図表8. 2年9月の類型Ⅱの生徒の追加調査時のインタビュー内容と類型の変遷

類型	人	性別	高校2年生(2013年)9月 インタビュー調査時点	高校3年生(2014年)12月時点の志望(決定)		
			第1志望系統・職業志向	類型 移動	第1志望系統・職業志向	職業志向・結果状況・追加インタビュー
II	A	男	市内地方公務員 公務員(事務職)	I	市内地方公務員 公務員(事務職)	公務員採用試験に不合格。臨時採用に応募・結果待ち 公務員予備校に通学するが教養試験は突破できなかった 民間就職も検討するが障害を考慮公務員を目指すこととした 来年も公務員試験を受験するため準備を始めている
II	B	男	美術大学油絵学科 美術系の仕事	-	美術大学油絵学科 美術系の仕事	芸術的なセンス・技術との間の差に悩んでいる 油絵をやっていききたいとの考えは変わっていない 美術大学進学へ向け美術予備校へ通っている 浪人も覚悟するが専門学校への進学も検討
II	I	男	道外公立医療系大学 (診療放射線技師養成)	-	道外公立医療系大学 (診療放射線技師養成)	2年9月以降も志望大学は変わっていない 学習・勉強への意味づけができずにこの時期まで来ている 学習時間は増えてはいるが成績上昇につながっていない 新設される道内私立大学放射線技師養成学部の志望変更
II	D	女	市内公立大学 看護学部	I	道内私立大学看護学部 看護師・保健師	11月AO入試合格 3年6月ごろから成績の見合いによる志望変更 受験科目がさらに絞り込める私立大学看護学部1校に絞り込む 絞り込みの理由は保健師コースがある(他は大学院でのコース) 受験チャンスを拾いたいとAO入試受験
II	E	女	道内国立教員養成系大学 幼児教育	I	道内私立大学薬学部 薬剤師	3年進級時より薬剤師への志望へ変更(家業の影響) 11月AO入試合格 成績の見通しから2年9月時点での志望が達成できないと判断 職業志向が不安定だったため、保護者の意向を受け志望変更 学習時間についても1時間~2時間程度である
II	P	女	市内国立大学文系学部 心理学・カウンセラー	-	道外(東北)国公立大学 心理学系統 臨床心理士	臨床心理士は高校入学当初からの志望である 3年9月までは市内国立大学教育学部志望 学習時間はそれほど多くなく成績も上昇基調が見られない 臨床心理士養成1種の国公立大学の線は譲れない 志望の押し下げ、9月から東北地区の国公立大学を決める 模試での評価が高いせいか学習時間が平日1時間程度である

は、成績・自己資本の資本量の維持のための行動が伴っておらず、引き続き、志望が拡散している状況にある。

類型Ⅲから3年12月における類型の変遷について図表9に示し検討する。類型Ⅲの1名(K)は、将来・職業志向が「なんとなく」やっていくとして類型Ⅱに変遷する。しかしながら「これしかない」と考え始めたことにより類型Ⅰへ変遷した。

類型Ⅲより結果として類型Ⅰへ変遷した1名(N)は、成績・自己資本の見合いから、3年12月

図表9. 2年9月の類型Ⅲの生徒の追加調査時のインタビュー内容と類型の変遷

類型	人	性別	高校2年生(2013年)9月 インタビュー調査時点	高校3年生(2014年)12月時点の志望(決定)		
			第1志望系統・職業志向	類型 移動	第1志望系統・職業志向	職業志向・結果状況・追加インタビュー
Ⅲ	N	男	道内国立工業大学 (建築設計系機械工学)	Ⅲ	道外(東北)国公立大学 機械システム工学	12月推薦入試で合格 インタビュー時は道内国立工大か教員養成系大学を志望 3年進級時より道外を視野に入れ第1志望を決める 学習時間は部活引退時より大幅に増加 成績の上昇が小幅 第1志望の推薦入試の推薦基準を超えていたので出願
Ⅲ	K	女	市内短期大学教養学科 市内私立大学観光学部	Ⅱ	市内短期大学教養学科 (職業動向未定)	2年9月以降の志望は市内短期大学教養学科のまま変わらず 観光を学びたい気持ちは就職先としてのなんとなくの志望 進級後の学習時間が1時間未満で成績の向上が見られない 指定校推薦で基準評定値に届かず出願できなかった 3年9月以降日々の学習時間を大幅に増やしている

図表10. 2年9月の類型Ⅳの生徒の追加調査時のインタビュー内容と類型の変遷

類型	人	性別	高校2年生(2013年)9月 インタビュー調査時点	高校3年生(2014年)12月時点の志望(決定)		
			第1志望系統・職業志向	類型 移動	第1志望系統・職業志向	職業志向・結果状況・追加インタビュー
Ⅳ	F	男	国公立大学文系学部 (決められていない)	Ⅲ	国公立大学 経済・経営学部 (道内外問わず)	志望を経済経営系統にしたのは部活動を引退した3年6月 2年生9月での仮想的な志望系統がそのまま確定志望になる 国公立大学への志望は2年生9月から変わらない 成績の見合いから確実性が強い大学名をあげている
Ⅳ	J	男	市内私立大学法学部 (決められていない)	Ⅱ	警察官採用試験受験 採用試験合格	「いけるところに行く」という進学意識は変わらなかった 2年1月以降に学習時間の上昇と成績の上昇と変化 3年7月警察官採用試験に出願(担任には伝えていない) 保護者が警察官であり警察官への志望は以前からあった 学習時間上昇は警察官採用試験に向けたものでもあった 12月採用試験合格が通知される
Ⅳ	M	男	市内国立大学水産学部 (よくわかっていない)	-	大学進学を希望 職業動向を決められない	インタビュー時から大きく変わっている 3年進級時は文系学部を志望し理系選択をしなかった 保護者の東京転動予定で都内私立大への進学を検討 成績が見合わず保護者の期待する大学への進学が難しい 「環境」「経済」「経営」と目まぐるしく志望が変化 志望確定も学習意欲の構築もできず学習時間も散漫
Ⅳ	H	女	私立大学文系学部 (決められていない)	-	私立大学文系学部 決めることができない	2年9月時点では市内私大から私立短大へ志望の押し下げ 成績が下がり私立短大教養学科への志望を固める 保護者の意向か都内中堅私立大を検討させられる 志望の混乱と成績上昇がみられないジレンマを抱える 学習時間は9月に入り大幅に増やしている

の段階までに進路志望の決定に決着をつける形で類型Ⅰに変遷している。

類型Ⅳから3年12月における類型の変遷について図表10に示し検討する。類型Ⅳから類型Ⅲに変遷した1名(F)は、国公立大学への合格可能性と就職への有利さだけで志望を絞り込む、将来・職業志向の不明確な状況が続いている。特定の大学ではなく、持ち合わせている成績・自己資本で合格できる大学を追求している状況にある。また、類型Ⅳから類型Ⅱに変遷した1名(J)は、「なるようになる」の将来志向と、保護者の勧めに自己納得し警察官採用試験受験、進路が決定している。自分自身への偽装という点でこの類型へ変遷したと分類した。類型Ⅳにあった生徒は、類型Ⅰへの変遷は見られなかった。類型Ⅳにとどまっている生徒は、将来・職業志向が混乱しており、志望校を確定できない状況にある。成績・自己資本の上昇が伴わず、大学進学に資本が追いついていかないジレンマを抱えている状況にある。

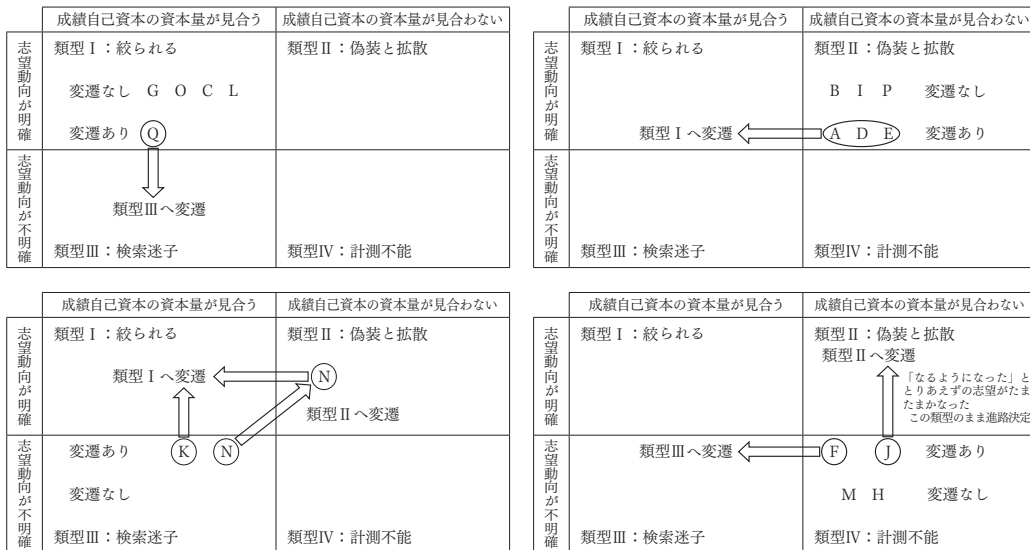
生徒の「悩み」類型の変遷を図表11に示し、3年12月での「悩み」類型の配置より総括する。

5 まとめ

(1) 類型の配置と変遷から見られる「悩み」について

類型Ⅰは、志望動向ははっきりとしており、志望校に対する成績・自己資本は確保されている

図表 11. 高校3年12月の追加調査における「悩み」タイプの移動



生徒の類型としていた。生徒は、外発的な要因から進路志望の決定を迫られながら、成績資本の増強や将来志向の適性などを理解し、進路形成上の「達成すべき目標」を見据えていく。「達成すべき目標」に対して、生徒は、「成績資本の見合い」「将来・職業志向の達成可能性」を考えながら、その過程で出てくる不安要素に見切りをつけ、「達成すべき目標」の達成に注力していく様子が見られる。

類型Ⅱは、志望動向の度合いをはっきりとさせてはいるが、成績・自己資本と比較すると志望が合致していない生徒の類型としていた。生徒は、外発的な要因から進路志望の決定を迫られることに焦り「本音と建前の達成すべき目標」を考える状況が見られた。類型Ⅰへシフトしている生徒は、「将来・職業志向の達成可能性」を追求していく。3年のある段階で「成績資本の見合い」「志望の押し下げ」を考え、「(本音の)達成すべき目標」を絞り込むことで、不安要素に見切りがつけられている。しかし、「悩み」類型が変遷していない生徒は、志望が拡散し、学習モチベーションの調達ができていない状況にある。

類型Ⅲは、ぼんやりとした志望動向の度合いではあるが、ぼんやりと見える志望校と成績資本は比較的達成度合いが大きい生徒の類型としていた。外発的な要因から進路志望の決定を迫られながら、ぼんやりとした「達成すべき目標」から明確な「達成すべき目標」を生徒は考え、「悩み」は類型Ⅰへと変遷している。明確な「達成すべき目標」は、成績資本の必要量を明確化させるため、類型Ⅱを経由する流れはあったが、不安要素に見切りをつけ、「達成すべき目標」の達成に注力していく様子が見られる。

類型Ⅳは、具体性が見えない大学への進学志向をもち、成績・自己資本が大学進学に見合うほど持ち合わせていない生徒の類型としていた。具体的な進路志望を決めることができないことに対する焦りと、成績・自己資本が追いついていかないことへの焦りの、二重の焦りが悩みになっている。志望動向や成績・自己資本の上昇への思考を停止させ、「とりあえず進学」というような状況を作り出している。生徒は、外発的な要因から進路志望の決定を求められるが、なんとなく

悩み続ける状況から、「達成すべき目標」が決まっていけない。表層的な「なんとなくの進路志望」へなだれ込み、実現可能性の低いものへと流れていくことが懸念される生徒である。

(2) A 高校における進路指導の困難性～生徒を取り巻く「世情」の絡み合い

本研究における「悩み」類型から探ると、生徒の進路志望決定は、シビアに規定された成績・自己資本から、ダウングレードの「達成すべき目標」に向かう層と、当初の「達成すべき目標」に向かう層が見られる。すなわち、「表層的な進路決定」の層と「きちんと悩んだ進路決定」の層が見られる。各類型における進路志望について確認してみると、類型Ⅰ・類型Ⅱは、将来・職業志向は固まっている。類型Ⅲでも、ぼんやりとしながらも志向している。類型Ⅳは、将来・職業志向の不透明さはあるが、進学という目標を持っている。

しかし、3年12月の追加調査時点では、「達成すべき目標」に注力できる類型Ⅰへの変遷は、成績・自己資本の資本量が見合わないことによる目標のダウングレードで変遷している生徒が多い。また、今回の調査において、成績・自己資本の資本量増加に伴う類型Ⅰと類型Ⅱの往復関係（成績・自己資本の資本量増加と志望校決定の可能性の追求、目標のアップグレード）を持った生徒の存在は見られなかった。3年12月において、成績・自己資本が追いついていかない類型Ⅱの生徒、目標がはっきりと定まらない類型Ⅲの生徒、その両方を持ち合わせている類型Ⅳの生徒が、インタビュー数の半数(8/17)残っている。「達成すべき目標」に注力できない生徒が受験期目前に多いというこの部分が、A 高校における進路指導の困難性を示している。

2年9月時点で類型Ⅰにあった生徒の「達成すべき目標」そのものが表層的なものであることも考えられ、類型Ⅰにシフトさせることがよい進路指導とはいき切れない。「成績・自己資本」と「将来・職業志向」とのシビアな関係から、生徒たちは進路志望の決定を3年12月の受験期まで引き延ばしている（受験期になっても決まらない）、という現実がある。それは、学校・教師の進路指導や保護者の進路期待とのあいだに折り合いのつく答えを作れない。答えを作るために、成績・自己資本の見合いにかなう目標にダウングレードするか、目標そのものを成績・自己資本の見合いにかなうものに変えるかの決断が迫られる。

そこに、生徒を取り巻く「世情」に着目した理由がある。競争が煽り立てられている中で、同質性の目標をもつ集団形成がありながらも「人は人、自分は自分」とし、進路形成においての本音をさらけ出せるような友人関係が形成されていない。「成績・自己資本」の変動による「志望の置き換え」が可能な地域性の中にありながら、容易に目標をダウングレードさせない学校の進路指導と保護者の教育期待にゆれる、生徒たちの進路形成上の「悩み」が隠されている。

「探す努力をしていない生徒」と高校教員を対象にした調査(リクルート2012)にあったが、本研究の調査では、彼／彼女たちは、探す努力はこれまでにしているし、これからもしてこうとする姿勢を持ち合わせている。しかし、進路志望の決定が難しい。それは、学校・教師の進路指導や保護者の進路期待とのあいだに折り合いのつく答えを作れない、そのあきらめが、教師側には「探す努力が見えない」という姿勢に見えると考えられる。多くの教師が生徒の進路選択の姿勢から、「進路希望決定が表層的に行なわれており」ひいては「探す努力が見えない」とみているものと思われる。本研究にて「悩み」類型の検討から得られた一つの大きな知見である。

6 今後の課題

本研究では、中堅受験校の高校生の進路形成上の「悩み」の特性をつかむため、2年9月段階でのインタビュー調査を実施した。「生徒の将来・職業志向」と「成績・自己資本」の2つの基本軸を設定、インタビュー調査の回答を分析して、「悩み」の類型化を行い、「絞られる」「偽装と拡散」「検索迷子」「計測不能」の4つの「悩み」類型を抽出した。さらに、3年12月段階で同じ生徒に対して追加調査を実施し、各類型に属する生徒の「悩み」は時間を経て遷移するのかを確認した。しかし、本研究における調査に以下の2点で課題を残した。

1つ目は、中堅受験校の生徒の分析としながらも、調査はA高校1校であり、インタビューサンプルも十分なものではなかった。しかし、本研究で検討を行なった、将来・職業志向と成績・自己資本の2軸による「悩み」の類型化は、生徒の進路行動を理解する方法として活用できるものとする。今後は、生徒の進路行動を理解できるかどうか、調査校およびインタビューサンプルを多くとり、その有効性を検証していく必要がある。また、本研究では、調査者は筆者個人のみであった。今後は、複数の調査者による研究からこの実証方法を検証していく必要がある。

2点目は、A高校の生徒の進路意識のみに焦点化したため、インタビュー調査を行なった生徒の家庭状況や性差による悩みの違いについて、「悩み」類型の分類や変遷による検討を行なったが、進路形成過程における全面的な検討を行なわなかった。追加調査では、家庭状況で進路を大きく変更した生徒もいたため、経時調査には必要な視点であった。

今後に課題は残ったものの、生徒の進路形成上の「悩み」を類型化できたことは、生徒の進路意識と教師の進路指導の橋渡しになる一歩になったのではないかと考えている。本研究が、高校進路指導の実践に対して何らかの役に立てば幸いである。

【引用参考文献】

- Benesse 教育開発研究センター, 2013, 「第4回学習基本調査(2006)」, 『高校データブック2013』 p.35.
- 菊地栄治, 1986, 「中等教育における「トラッキング」と生徒の分化過程——理論的検討と事例研究の展開——」『教育社会学研究』第41集, pp.136-150.
- 近藤治, 2009, 「多様化する大学入試とその課題」, 『工学教育』Vol.57, No.1, pp.10-14.
- 望月由起, 2007, 「進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪 高校進路指導の社会学」, 東信堂
- 文部科学省, 2011, 『高等学校キャリア教育の手引き』, p.43.
- 日本キャリア教育学会, 2008, 『キャリア教育概説』, 東洋館出版社, p.40.
- 大滝夏美, 2013, 「高校生の進路選択に関する志向性と今後の高大連携施策のあり方について」『立命館高等教育研究』第13巻, pp.15-30.
- リクルート, 2012, 『「2012年 高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」報告書』
- , 2013, 「2012年「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」 引き続き「進路指導」の難しさと動き出す「キャリア教育」」『キャリアガイダンス』No.45, pp.6-31.
- 佐藤公文, 2010, 「キャリア形成を目指した進路指導——進学校の生徒を対象に——」『キャリア教育研究』第29巻1号, 日本キャリア教育学会, pp.37-38.
- 高橋伸行, 2014, 「高等学校における「進学校」の風土と文化」『椋山女学園大学教育学部紀要』第7巻, pp.45-53.
- 當山明華, 2010, 「高校生の学習動機づけと進路展望に関する研究」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第58集第2号, pp.329-341.
- 山下真司, 2014, 「「親子一体化」が進む進路選択 グローバル化社会を見据えた高校生と保護者の進路意識の変化」『リクルートカレッジマネジメント』第186号, pp.40-49.
- 全国高等学校PTA連合会・リクルート, 2013, 『第6回高校生と保護者の進路に関する意識調査2013年報告書』, リクルートマーケティングパートナーズ